

New asymptomatic ischemic lesions on diffusion-weighted imaging after cerebral angiography

Shibazaki K, Iguchi Y, Kimura K, Ueno Y, Inoue T

J Neurol Sci 266 : 150-155, 2008

(目的) 急性期脳梗塞患者に脳血管撮影 (CAG) を施行した後, DWI にて検出される新たな脳梗塞が発生する頻度を研究した。(対象, 方法) 2004 年 5 月～2005 年 6 月の発症 48 時間以内の急性脳梗塞および TIA の患者を対象とした。CAG を施行した 56 例の急性期脳梗塞患者には CAG の前後 48 時間以内に DWI を施行し, CAG を施行していないコントロール群の 55 例には梗塞発症より 48 時間以内と 7 日後に DWI を施行した。若年者と, MRA 等の画像診断より脳主幹動脈の狭窄が示唆された症例を CAG の適応とし, 血管撮影は 3 人の経験ある脳卒中神経医が担当した。CAG 群とコントロール群の DWI で検出された新梗

塞の発生頻度を比較し, ついで CAG 群を新梗塞陽性群, 陰性群に分類し新梗塞に関わる因子を統計学的手法にて検討した。(結果) DWI における新梗塞は CAG 群に 43%, コントロール群に 31% と CAG 群に多くみられた ($p = 0.192$) が, CAG 前後に神経学的所見の悪化がみられた例はなかった。CAG 群における陽性群は陰性群に対し平均透視時間が有意に長く (26.5 分対 14.9 分 $p < 0.001$), 透視時間 17 分が両群の分別域であった。(考察) 今回の結果より推測すると, 急性期脳梗塞患者に CAG が脳梗塞を引き起こす確率は 10～15% と予想された。以前の論文では造影剤の使用量が脳梗塞を引き起こす因子とされたが, 本論文では独立因子にならなかった。これは造影剤, 生理的食塩液へのヘパリン添加の効果かもしれない。(結論) DWI における新梗塞は CAG 群に多くみられたが統計学的有意差には至っていない。CAG 群において透視時間は新梗塞に関連する独立した因子として示された。

【コメント】自然経過の脳梗塞再発, 進行も含め急性期脳梗塞患者における CAG 後無症候性脳梗塞は 43% であった。十分な CAG の適応の検討, インフォームドコンセントおよび慎重な検査手技が求められる。

Surgical management of spinal cord haemangioblastoma

Shin DA, Kim SH, Kim KN, Shin HC, Yoon DH

Acta Neurochir (Wien) 150 : 215-220, 2008

脊髄血管芽腫 20 症例, 24 手術の結果を検討した論文である。(対象, 方法) 1991～2005 年の間に同一施設, 同一術者が行った脊髄血管芽腫 20 症例, 24 手術を対象とした。男女比は 12 : 8, 平均年齢は 49.4 歳, 平均観察期間は 5.6 年, 2 症例に von Hippel-Lindau disease が確認され, 20 症例すべてが症候性病変であり無症候性のものはみられなかった。同期間内の脊髄手術に血管芽腫が占める割合は 2.4% (20/840 症例) であった。術前, 術後, 最終診察もしくは最終調査にて神経学的機能評価を行い, MRI は術前後の全症例に施行した。手術手技として, すべての症例に一塊での摘出を試み, 数例の深部病変には脊髄正中に軟膜切開を加え腫瘍に到達した。最初に栄養血管を処理し,

導出静脈は手術の最後に処理した。(結果) 空洞症と嚢胞をまとめて嚢胞病変とした。これらは 13 症例にみられ, 10 例に空洞症, 3 例に嚢胞, このうち 1 例には両病変が認められた。嚢胞病変と腫瘍体積に相関はみられなかった。嚢胞病変を示す症例は, 術前に運動麻痺, 知覚異常を来す割合がそれを持たない症例に比べ高かった。初期 3 症例には嚢胞にシャントを施行したが, 以降はシャントを行わず術後に嚢胞病変の消失がみられている。20 症例のうち 18 症例に全摘出が行われ, 部分摘出に終わった症例は強い癒着, 出血などがその原因であった。術後の神経症状に相関するのは術前の神経症状であり, 年齢, 症状の罹患期間, 腫瘍体積, 腫瘍全摘か亜全摘かといった要因に相関は認められなかった。全摘出例での再発は 3 例のみであるのに対し, 亜全摘全症例には再発がみられた。

【コメント】脊髄血管芽腫の術後神経所見のよしあしは術前神経所見と相関しており, 全摘出は再発の観点からも強く推奨される。過去の文献と相違のない結果ではあるが, 脊髄血管芽腫の症例そのものが稀なものであり多数例の報告は貴重である。

(犬飼 崇 愛知医科大学脳神経外科)